



諸國
圖會

年中行事大成

四

共六

76
3382
4



門 36
3382
卷 4

諸國
圖會
年

中行事大成卷之三上

四月之部目錄

上卯 糺荷 祭 未 住吉卯祭 大神祭 大和

上辰 八瀬 祭 未

上巳 山科 祭 未

上午 菅宮 祭 未

上申 平野 祭 未 江文 祭 未 新宮 祭 未 當麻 祭 大和

上酉 松尾 祭 未 右 祭 未 梅宮 祭 未

上亥 大津 祭 未

中子 右田 祭 未 中山 祭 未

中卯 八幡 祭 未 宗像 祭 未

中辰 向日 祭 未

早稲田 大學 圖書館
第 25 号
購 本

中午 御落祭 糸 多賀祭 糸

中申 山王祭 糸

中酉 葵祭 糸

中亥 暖減祭 糸

朔日 更衣 糸 孟夏旬 糸 貢水 糸 虎杖將 糸

三十日 溝 糸

三日 山崎日頭 糸 廣瀬龍田祭 糸

四日 水屋能 糸

七日 擬階姿 糸 結夏 糸 比叡山戒壇堂佛生會 糸

八日 灌佛 糸 水芝瀬祭 糸 真福寺佛生會 糸

春日安岳祭 糸 岩田壇帳 糸 菟摩祭 糸 芝祭 糸

浅間嶽散談集 行成

九日 地主祭 糸

十日 尚麻蓬竹養 糸 神夜祭 糸 土塔會 糸

十五日 新越野社大般若 糸 五山秉拂 糸

十六日 三井寺千圓鏡 糸

十七日 日光御祭 糸 河宮御祭 糸

十八日 如法御會 糸

十九日 高野花供 糸

廿五日 端午御人於石用 糸

廿八日 駒 糸

月令 子規啼 糸 菜搦 糸 牡丹芍薬遊子死罪 糸

麦秋 糸 笋進献 糸

目錄年 糸 松恭波 糸 鶉飼 糸

諸國會 年中行事大成卷之三

四月之部

禮記月令云是月也始蠶鳴... 禮記月令云是月也始蠶鳴... 禮記月令云是月也始蠶鳴...

立夏 漢書曰夏之假大... 漢書曰夏之假大... 漢書曰夏之假大...

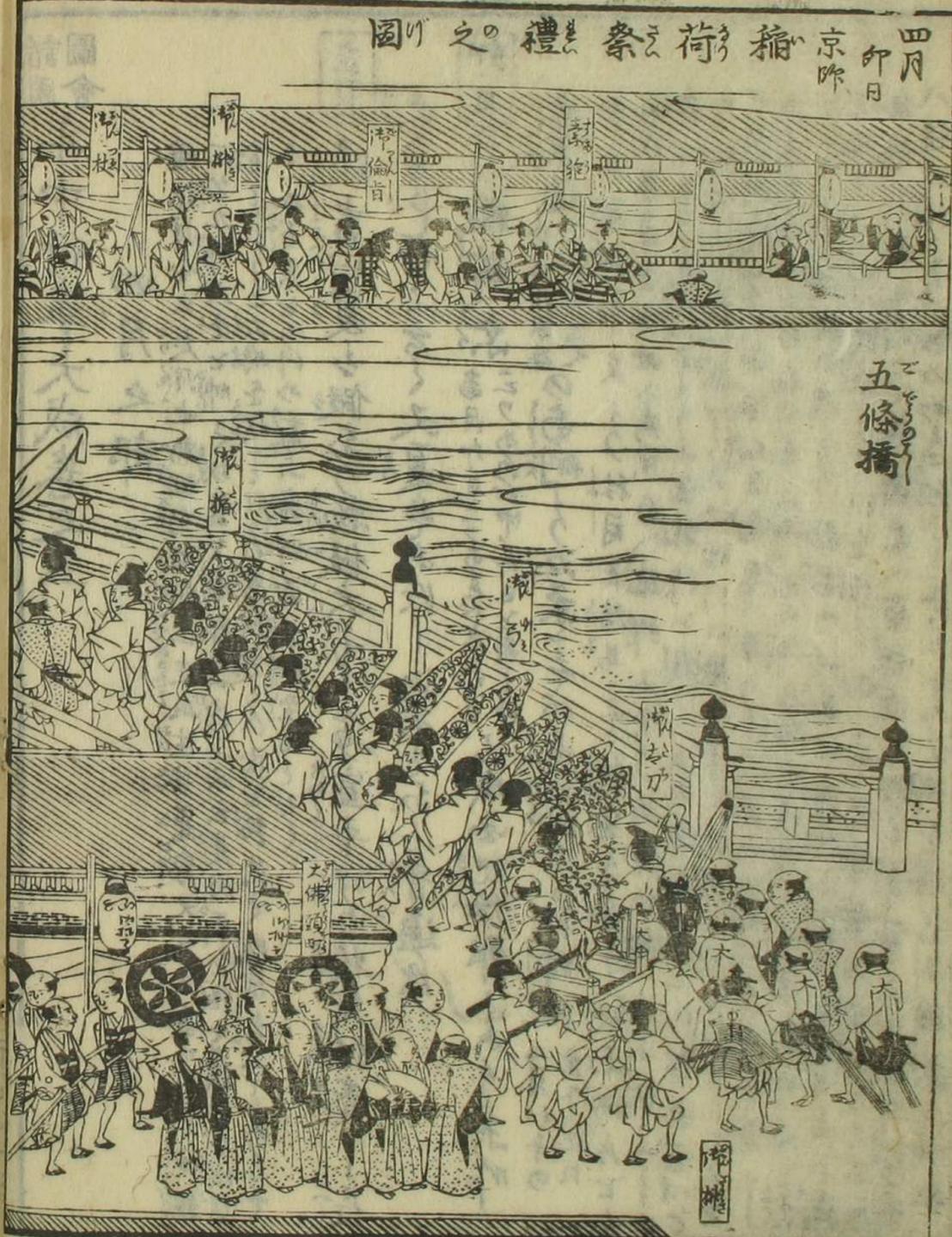
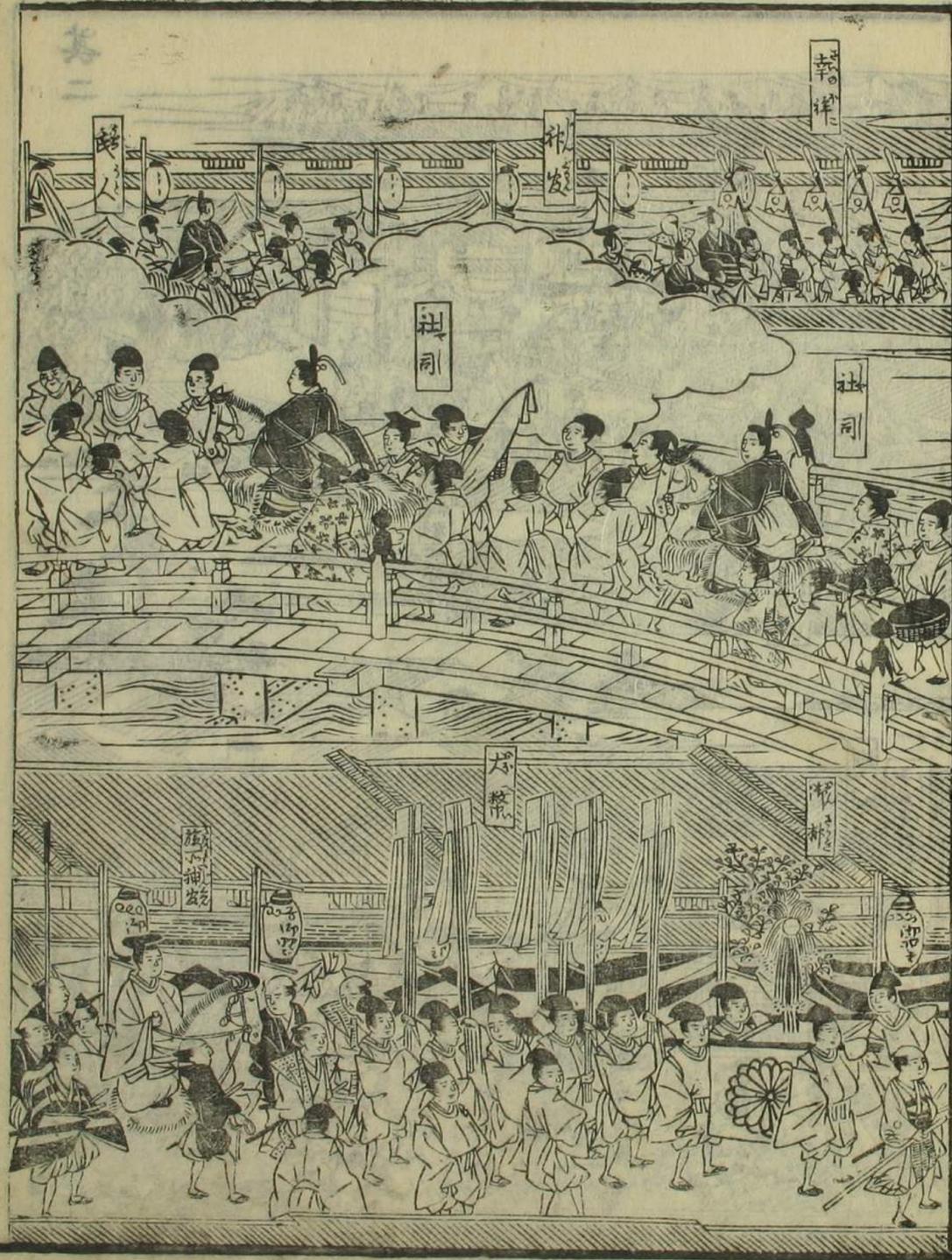
大... 又夏... 也... 音通...

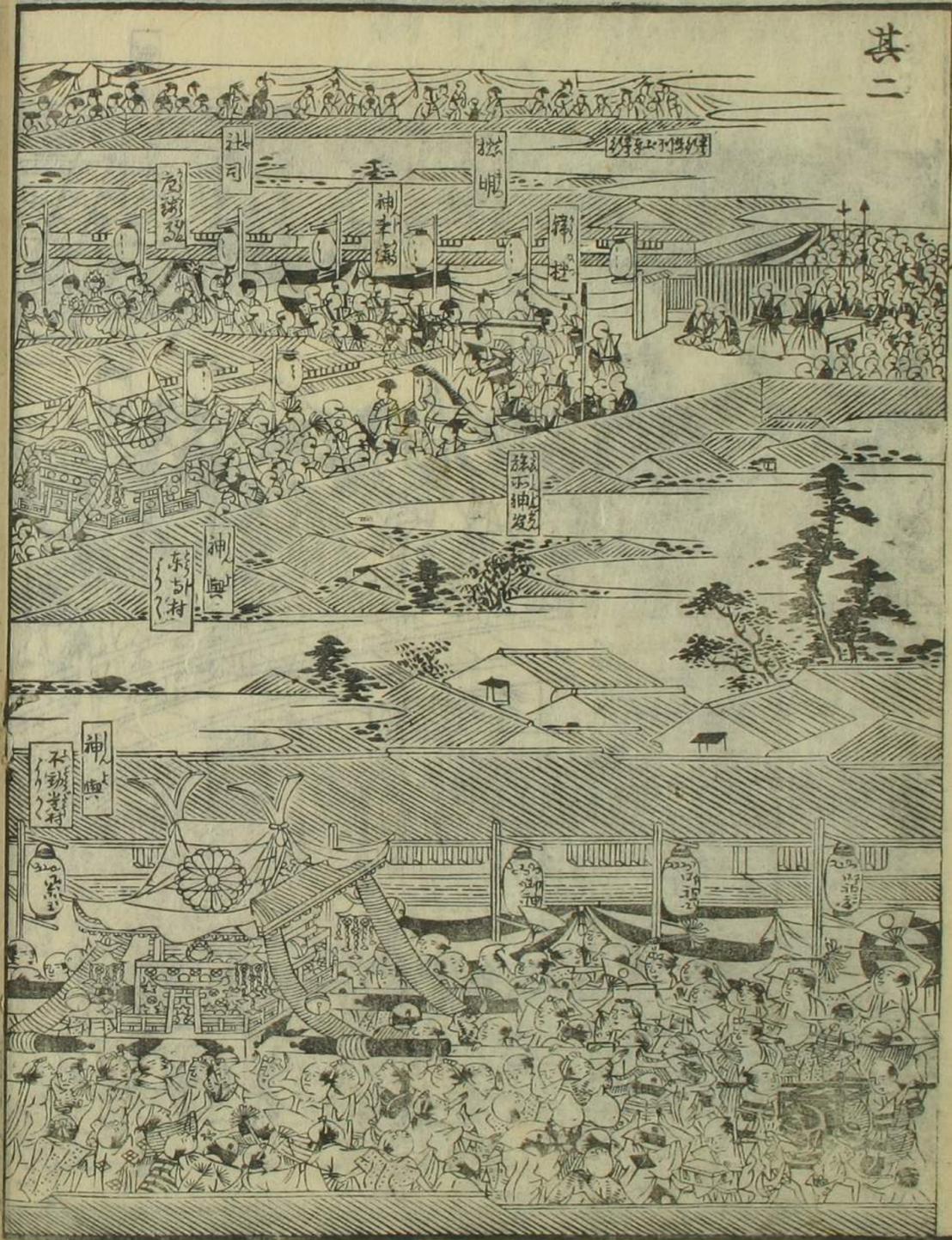
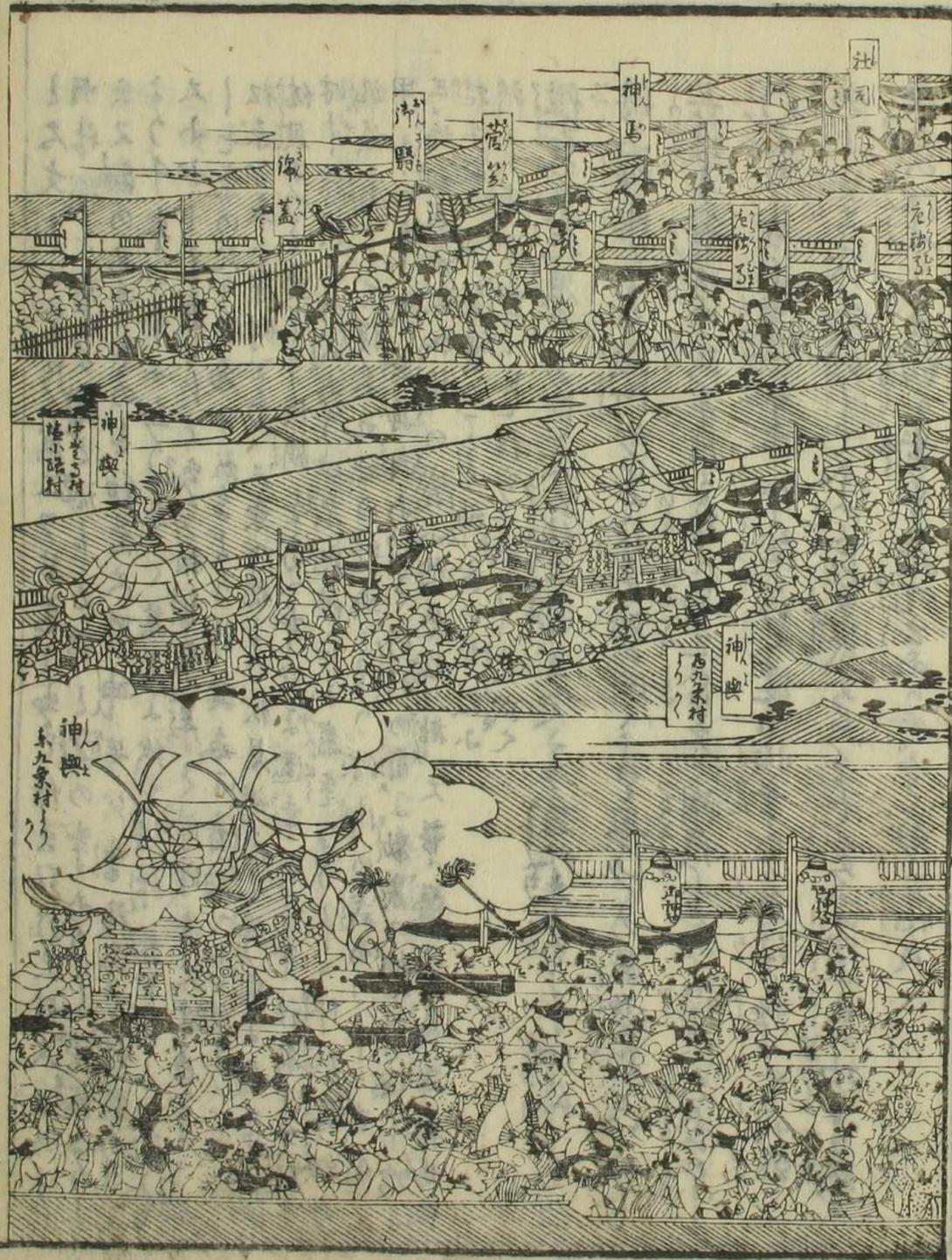
京師

卯日

縮荷... 五月... 縮荷... 五月...

五... 五月... 五... 五月...





と大文字小書に成二ツ其意は物と傳ふ弘法大師入海の事
 明神編を考へる籍と現ト之降と雲の事ありし中縁ありと
 云又教のめきその初先大降神号成書抄のくは施ありし
 より千年の今小御の年々其の上は紙と張神号と書とつと
 大小少しも変ぜんといふ板を筆早く改神真大は毎をわ
 七条の北してあや放ちより神真毎は清和と御あり是計り
 松系と東へ寺間とあり又東の橋より伏見御乃大御系より
 依則あつてまより日御を南へ本社は遷幸あり本社系より
 甲辰の年一基基再興ありは神真の神式ありし中縁の
 弓楯の年一基基再興ありは神真の神式ありし中縁の
 括木教の神雲のてく神真の神式ありし中縁の
 列一威儀堂とて住古小塔せし式ありし中縁の
 徳吉の系祀者ありし是古徳吉物小見くより意に奉るし中
 依不神真をより酒清ありて生去地の所くとも思ひくの
 其後小教派の成を所を拾んおを食まく増後小教派を食系と
 河名せし成を世安永年中生去の人達也恒幸する者深く
 凝し生去地の人を以て今の成を式とせしるを實小速水
 橋の神人より其功を賞する此成を以て今成は成

上卯

○ 任吉卯系

攝津國任吉郡小あり 神傳六月庚午あり

○ 大神系

大和玉城上郡小あり 三輪神と云 大己貴命

○ 神代卷

大己貴神の幸魂奇魂今何の所は任人中務しや對云吾日中

國の二諸山は任人を務し或は即宮を彼所ふ宮を就く居くしむは之三輪

上辰日

○ 八瀬系

山城國愛宕郡八瀬里小あり 系神二座 日言八王子 天瀧宮

神傳一基基後創小瀨ありて神傳あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 の式村長西三人村とて神傳あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 とを神傳あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 次は小瀨村十人の子れふ又此の紙を付或は風流の人神傳の物を好神傳
 と考は是を神傳の相子よありて月あさんやきくや神傳の確りあり
 去被証を打日トく神傳ありて神傳あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 早そのも日トく神傳ありて神傳あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 場小瀨と競馬二夜あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 ありて年小瀨と競馬二夜あり其後辛未遷幸ありし中縁の
 場を二夜遊遊ありて神傳あり其後辛未遷幸ありし中縁の

中卯

八幡祭 近江國蒲生郡八幡村あり 祭神石清水日下

一條院淨土に馬場小助信慶長年中松山より移る別當所と成成統志
と云はれ古坊舎五十二箇寺あり織田家の兵火よりつくく亡滅を

其武中卯卯と有文より後彌あり社宮祭兩日ト宮祭兩日其中
る一日と祈禱祭ありと云ふ所は横門の同小社と云ふ九十二三圍と云ふ六七
と云ふ是れをまうと一圍或は二圍中の燈火と云ふ一社の燈三人と云ふ
も燈を先は燈をいさめを左鼓とてお辰の也して拘子彌ありては
へいサハラキヤウと拘子を神樂五座紙智川を渡河あり
古老傳云番社と云ふ守後の老林よりふよりへいサハラキヤウより
年おたけりげりと從格のよかりなり也と云ふ其是れ也と云ふ

京師

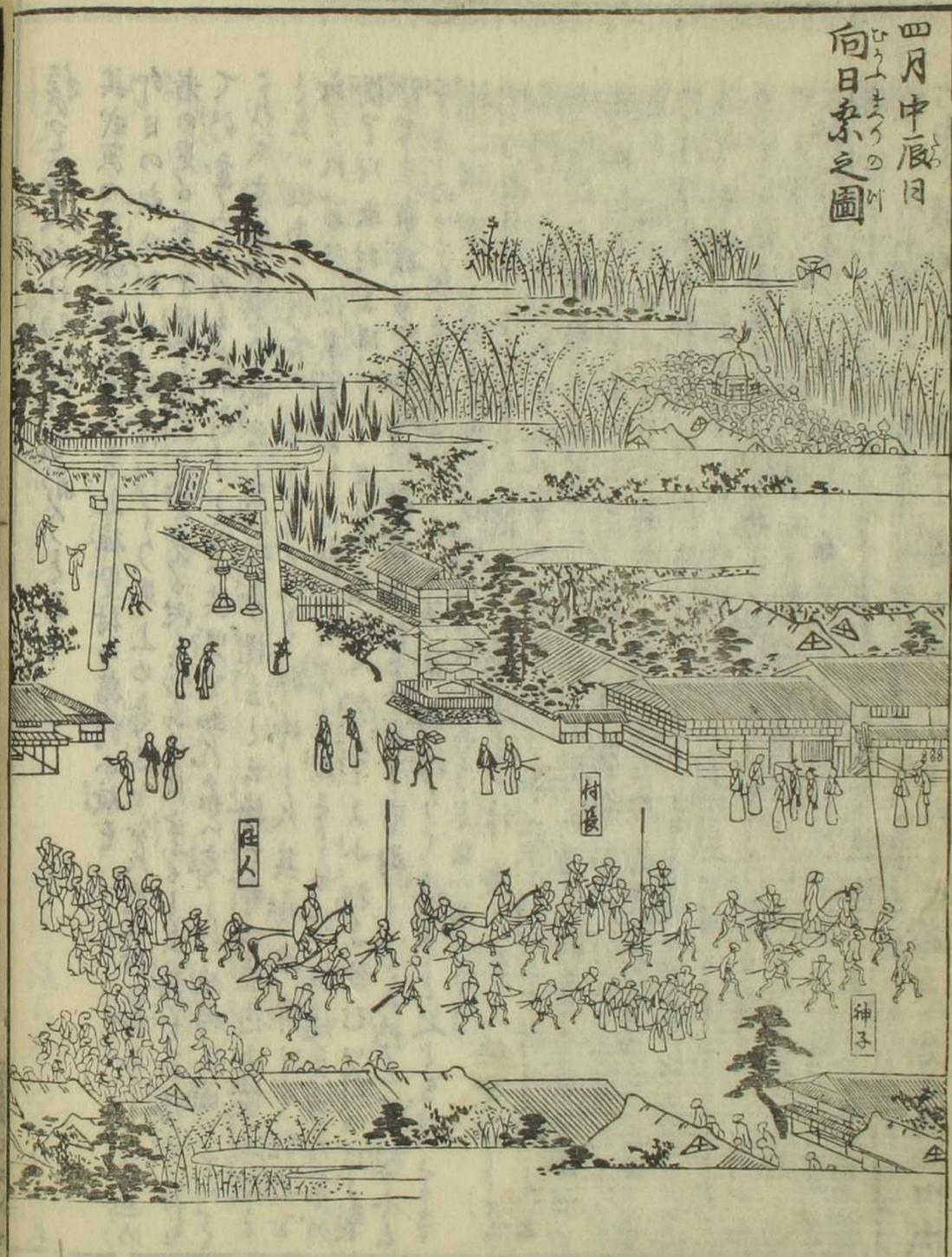
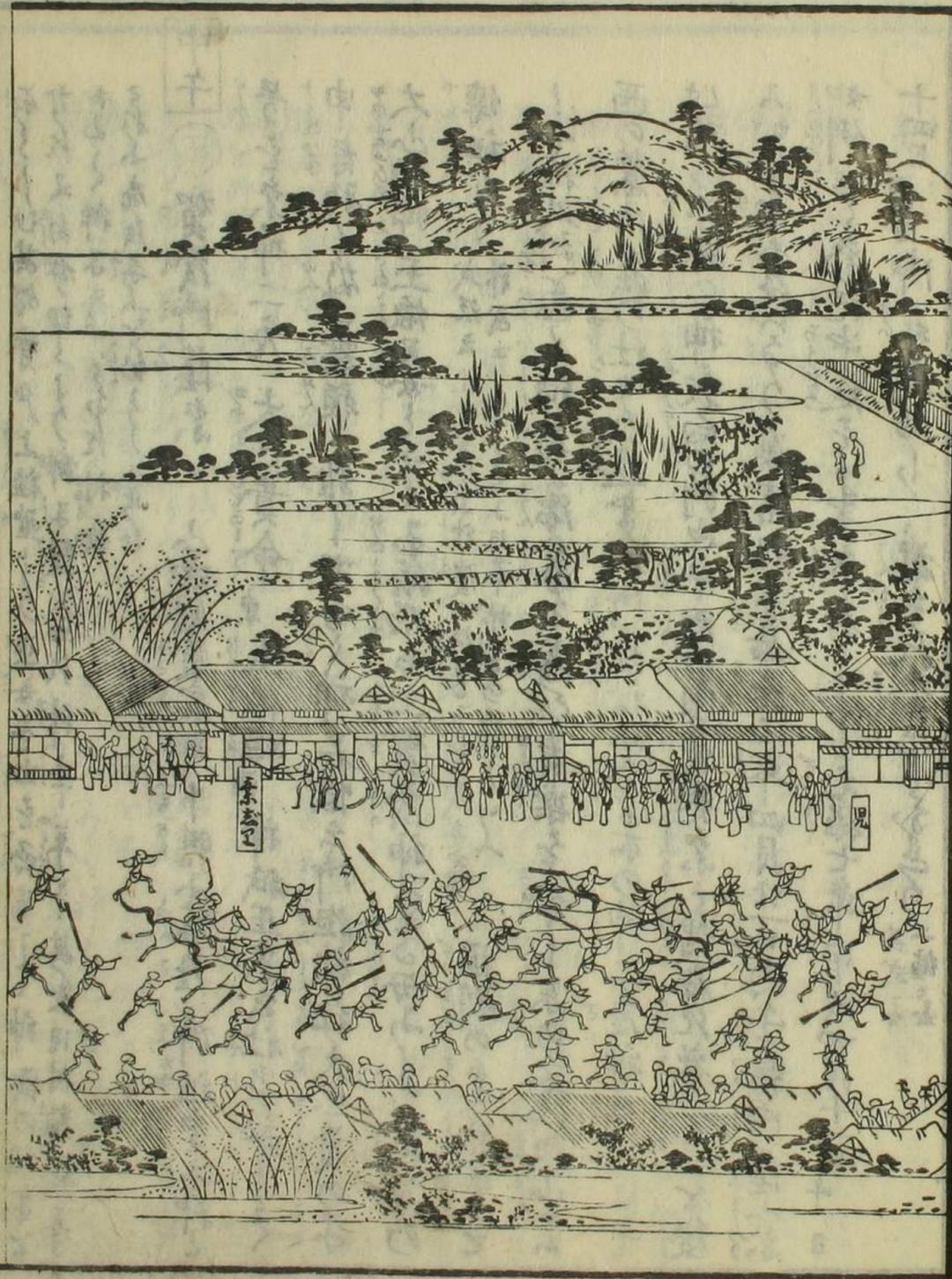
中辰

向日明神祭 山姥團乙訓郡西尾あり 祭神素盞鳴鳥

御孫大歲御子 一説云可愛山陵ありて神武天皇の御孫と云ふ
寺起云岡山隆豊律昨ハ統孝定惠の皇子にして養老二年定倉
少よある村翁松勢は翁也遇ふ翁云吾も是日向可愛山陵を移る
け山姥はとも更久し一箭と教河ありて一と云ふ其是れ也と云ふ

後と移る向日明神是なりと云ふ

其武宣の日神樂とある上極野村の移所は後を
卯日の叔母河津馬場村より馬上の意と云ふ一村の秘ありて其也の
者に見る事と云ふ若是と見る時をわらふに云ふは移りの者半也
て仍舊と云ふは業形と云ふ其見と云ふは定むるに隣村と云ふ
るに定むるは思の装束と云ふ同村取捨と云ふは寺の境内に装束と
と云ふ小祠あり其装束と云ふは中と云ふは其夜後神にして燈火と
云ふは中村に其装束と云ふは又馬中と云ふは納むるの代り
後日東村より移して其装束と云ふは又馬中と云ふは納むるの代り
作せし夜振もやかくは折振を付すも形と云ふは其装束と云ふ
中早のてはれそのなり也又云其夜雨降りて傳々と云ふも
祠の納むるは年出せば必なりと云ふ一奇あり
中卯の辰日申の別ありて還幸の式あり 神樂二基上極野
格別ありて是れを乃と云ふ一寺戸村ありては神樂の形ありて
神樂を思ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
神樂を思ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
長刀と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
戸内と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
其作振神と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
其作振神と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
竹と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
に割竹と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
滴の思れと云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
糸と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
糸と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神
糸と云ふは馬と云ふは其装束と云ふは中と云ふは其夜後神



中午

賀茂清蔭系

山邊國愛宕郡下鴨小落庄

清祖皇太孫

号と宗神二座大已貴命 東玉依姬 西神祇正宗云社家秘

申有形 乃露額 難一ヤ云 神名帳云清祖神社大已貴の子

大山作神 玉依日女と云 玉依姫と上賀茂神の母ありて清祖乃

傳秘たり 武深云上賀茂系神祇之祥より下賀茂系を宗

して神人列と云 神馬と清蓋を慶の青樂を奏し 東の方比叡山を

西の麓清蔭の社より逆舟於清蔭社小系より西の神二座神傳秘して

は地ち下鴨の神祇向の前也 平西の西日丸葵系と謂る凡葵系柱と變

如例云 祭紀中絶する事奉あり 一が元禄七年甲戌四月十日 午日

十四日 酉日 清再興あり 歳を此祭紀と云 其式云 二編云

多賀系 近江國犬上郡あり 宗神 伊弉諾尊

神代卷云伊弉諾尊功賜より徳亦大あり是もむねを云ふ云々

報命して乃日之少宮小留宅云々 近江古良の言日の初く物所なる

祭式本頭人云 伊弉諾尊の御代より大上郡の内にて嘉安此者と稱す正月

二日の兼神 祭を何いて定む日 日其頭人ありたりた系多賀の

祭二十日 神官云 本々清蓋と云 祭紀云 伊弉諾尊の御代より

祭具具云 清蓋の六人脊小多賀大社と云 又清蓋と云 伊弉諾尊

其教立抄云 十人清蓋と云 伊弉諾尊の御代より清蓋と云 伊弉諾尊

凡九五人あり 清蓋と云 伊弉諾尊の御代より清蓋と云 伊弉諾尊

りり清蓋と云 伊弉諾尊の御代より清蓋と云 伊弉諾尊

清蓋と云 伊弉諾尊の御代より清蓋と云 伊弉諾尊

二月廿日山門を訂定より奉同 勅件の上其前執務代へ増達られ
又山門より奉同に於て若くは下知の一通を送る
次の廿日大政所の後連繩を立致御拜と云々
同日申刻八王子系を以て午の神直と云々其式八王子二宮の神輿を
両宮より出し返と下り二宮の拜殿に渡りあり發圓の公人遣と云々
舞を焼く洗氣式付と社奉奉あり

今日好の五社の清装束と云々又大政所の神拜と云々除糞進行二午
立内其好上右の鳥居跡七箇所は格を付と云々唐橋多居次下坂中
両社の辻比敷は若くは大鳥居後政所馬場取納所の辻二宮橋のわ
りあり又唐寄宿院は竹に十九かと云々此と云々下坂本大間
町大工中橋即ち唐大津神出所大工源左衛門素禰と云々一箇
年と云々

未日五社の神輿の清装束と云々其内大宮聖太子客人の神輿と
大宮の拜殿は移り又二宮十福所の神輿と云々一箇と八階
小掛あり

日未日二宮政所は幸あり八王子二宮加へて二社あり申し
日未日二宮政所は幸あり八王子二宮加へて二社あり申し
日未日二宮政所は幸あり八王子二宮加へて二社あり申し

承して流流云人小不冠冠さる馬場より杖をみ入る皆と重く若答意を
承し見の杖をみ入る童子一人眉と作て長指袴と冠一袖扇と持は昨の
肩小不冠大衆これより上より居して三院互に酒盃ありは返り恩
方より出く

未列座主のより幣使純色の袍裳五條の袈裟とけ神幣七中次
をうく大宮より幣使は附社家樹下生原寺の式人衣冠と冠一騎馬して
大宮より幣五色の幣七中と宝帯みなる座主の幣七社之神幣小
後一祝言あり幣使大宮の階を三階より宮仕を柱の枝を廻り
其日よ系ありと形人次神馬と牽くは附神幣五柱の枝と形人

大津に或る大御と氏名松平平飛明神粟津五所社の神人依持
若き小列して祝言ありて神幣と取先旧例として其列の御幣上
下と冠一幸洋小紐をちく懸ふ承して神幣と上坂中神の文ふある
未列文仕三人神の文ふある其内容客人社の文仕幸幣後云あり

未下神幣堅固の云人并下坂中比敷道の使者遣を忘中此高井の下に
集を生原の港とけ度三度其式年神幣又月ト堅固の中より及
者とぬく神幣使の幣七度事の使あり次は神幣大文へ換は其列大幣
宮仕三人素襖の者五十人に文神人幸洋五所神人衣冠騎馬して夜
笠を覆ふ松平馬場町上は遠角の見巻赤色乃裝束と馬小不冠

氏名松平平飛明神人式人騎馬して各大御と依持其道筋下司の
持別作とけ多條の共此文札を制一罵言と甚一は三院の杖
後承して獅子田樂舞あり是より云人百十餘人各遣と冠を次は三院
別當六別當十六台の云人二十餘人夜と冠三院中台の云人五人の年

寄次は昨上坂中の使者八十餘人漢方の使者六十餘人教く二百人計
次は七社の幣丁七十人加勢も千人計は是より次は七社神
輿を去日の忌日恭後一并出副振とけは間比敷道の使者大橋の
に列し刀扱と握く人の通路取むは附社家大座より下りて去日忌日
ぬく笏拍子鼓りつくと神幣と奏は是と去日忌日と云

申し神幣幸幣一神幸あり依持の式神馬七匹七社の神幣其
内大文の神幣五匹猿田彦の面を掛ふ七社のを被次は社家式人衣
冠騎馬して依持一人を大高井の意は止一人は七中柳子に文神を

次ふ文仕幣と持し各七中柳子に文神を其前に
柱の枝一抱つて二院其若其社の文仕其院への杖後へ持是次は七社
の文仕神幣を持次は幸洋持七人各馬場と下り七社の神輿馬場
と下り小先後と幸の競ひ進む幸甚意あり惣合の高井の下并

大橋の東門所ありと鹿と振り列の進歩形くじめんあり神輿を
かてく七中柳子に文神を幸洋に進歩を速く勝つと神輿の儀少
く文神をこし掛ると印しを懸けく神中へ引き文神人教十
人神を備幸又若りて神出く幸傍しを五所神あり神神と列
を中央大宮左二宮

神神を各東に向は附神酒と依し幸幣祝云あり
附し粟津の神神神大文の神はお針一本神神神幣と小神
後一人素袍袴と冠一赤色の袴とけ神を備小被実ありて大文
の形より神幣幸幣式大文の本守に後を本守是と客人の宮小被を
社家是よりつくと神幣祝云あり次は神供神を幸縮小五條と冠

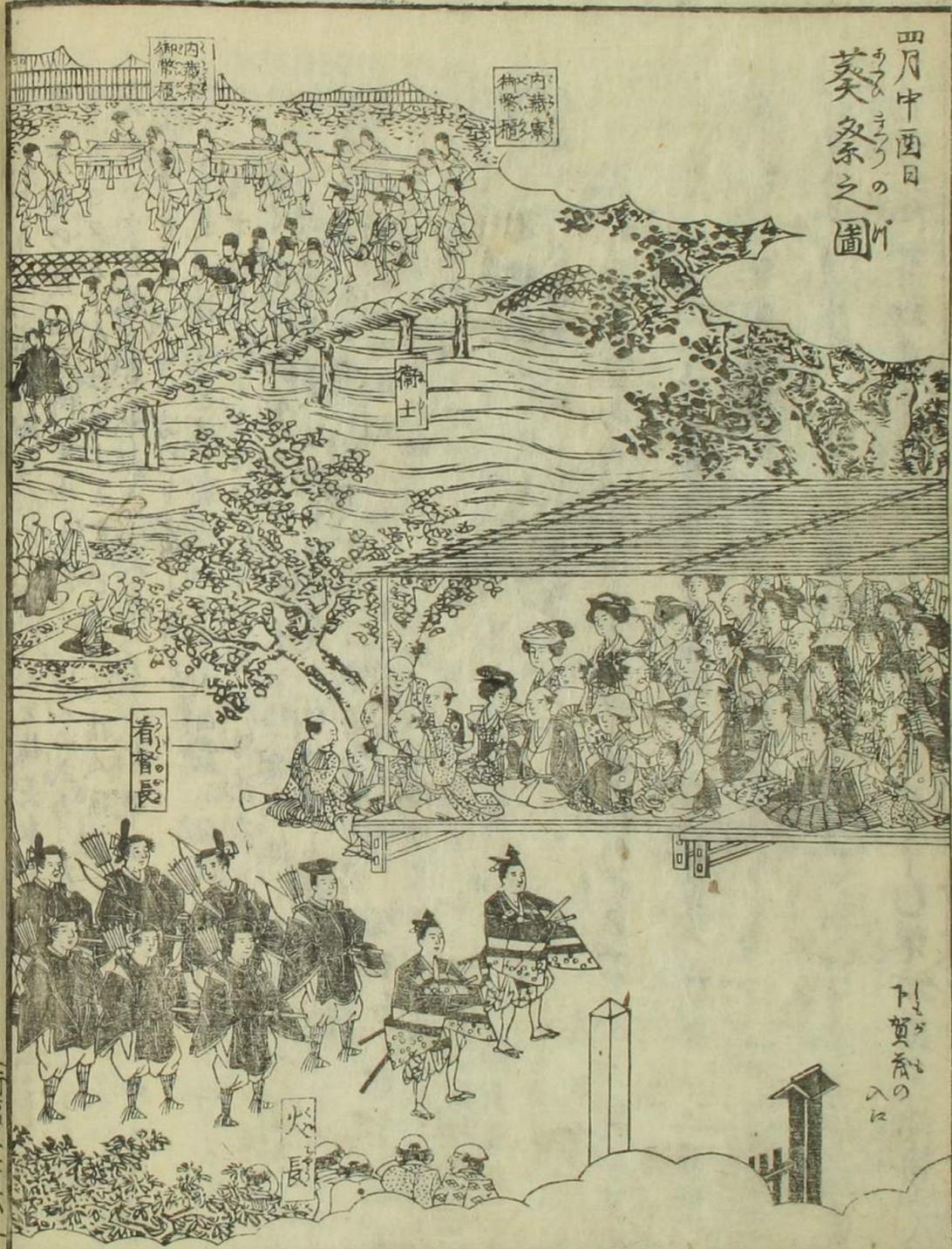
取仁坐齋主神止於下之千早振惡神於悉皆伏順奉天遂報申
此後建角身命國々於見巡之御座於是天鈿女命磐樟船乎漕奉
利尊於神代乃浦乃浪靜奈留磯未天送利御座乃天乃神與利賜之神
寶乎以天此國固止成世玉波幸止天北山麓應化之百王於守利玉布經
津主武雷神同此所垂跡之玉倍利

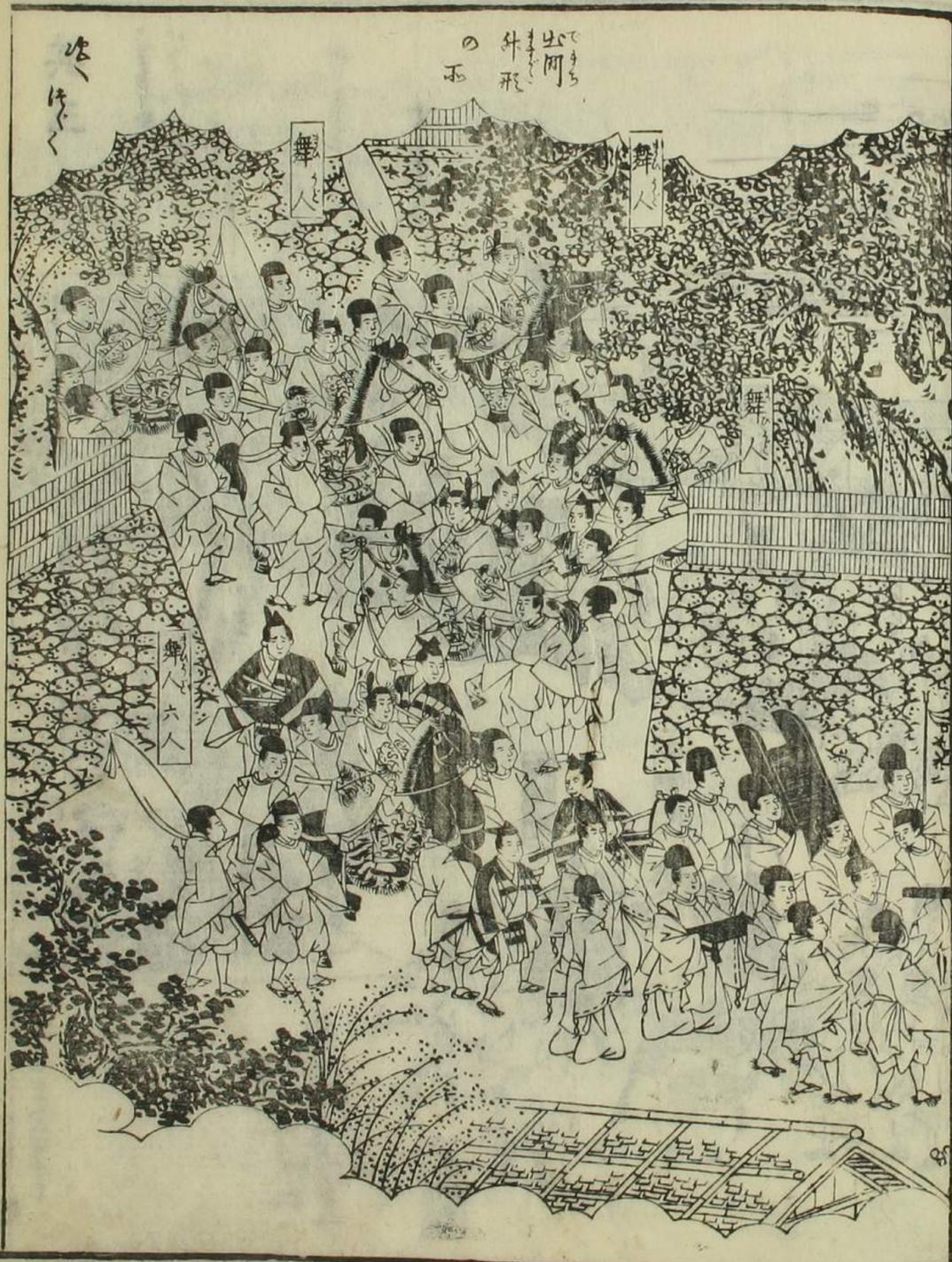
續日本紀云元明天皇和銅四年四月乙未詔あつて賀茂神奈日自今以
後國司よ毎年親臨檢察せよと云

云夏根津云未日之上卿陣あまの六府とあり登園のうみ城作とあり
使と迎傍の中お將はとむ若妻のほげはりしよりくくあつては桂の渡と
か之内也賀茂松尾の社司との日とをさる所へ玉所とくまてまらる欽め玉を
御さうとむいさはらとく御さる御事以て大祀中祀小祀と有り
一月の神事と云大祀と云大嘗會と云也二日の儀の中祀と云一今賀茂祭
ねと一日の神事をば中祀と云松尾祭御事以下松尾の祭と云

社傳云志貴嶋宮乃御宇天皇於御世天下國奉之風吹雨零其時於海
若日子以勅してト志貴乃下別トして奉賀茂の御神乃事と云
二月吉日以撰て馬本終をけん新新を若くして地して以て冬終を
てく終新をあらはるをよとて五穀成熟して天下を年終りて
み始より中畧し御玉乃事と移る所と加さるの委おふ乃我たり終の
とくよ官人使して遺遺をせし職奉上下乃作とけり指授して
終奉終ると高桑の儀と天子出御あつて林中へ系使不司内侍以下
女官清府乃宮儀神寶列之の次第中御所と必處覽あつて事向あふ
れり此祭中もさる也と云

其武庫日御使と迎傍の中少將の御家ひらひり又山城使とて山城令も
むしりては和銅年中御事ありて山城乃國司御事せしより終りて
その内是御事ありて宣命ありてある是と内是御事ありて内是御事ありて
生二人と御事ありて守儀し馬寮の元は馬を案し御事ありて御事ありて
利波二人御事の舞人二人とありて馬寮の元は馬を案し御事ありて御事ありて
人陪從とありて御事ありて御事ありて御事ありて御事ありて御事ありて
御事ありて御事ありて御事ありて御事ありて御事ありて御事ありて御事ありて





其二

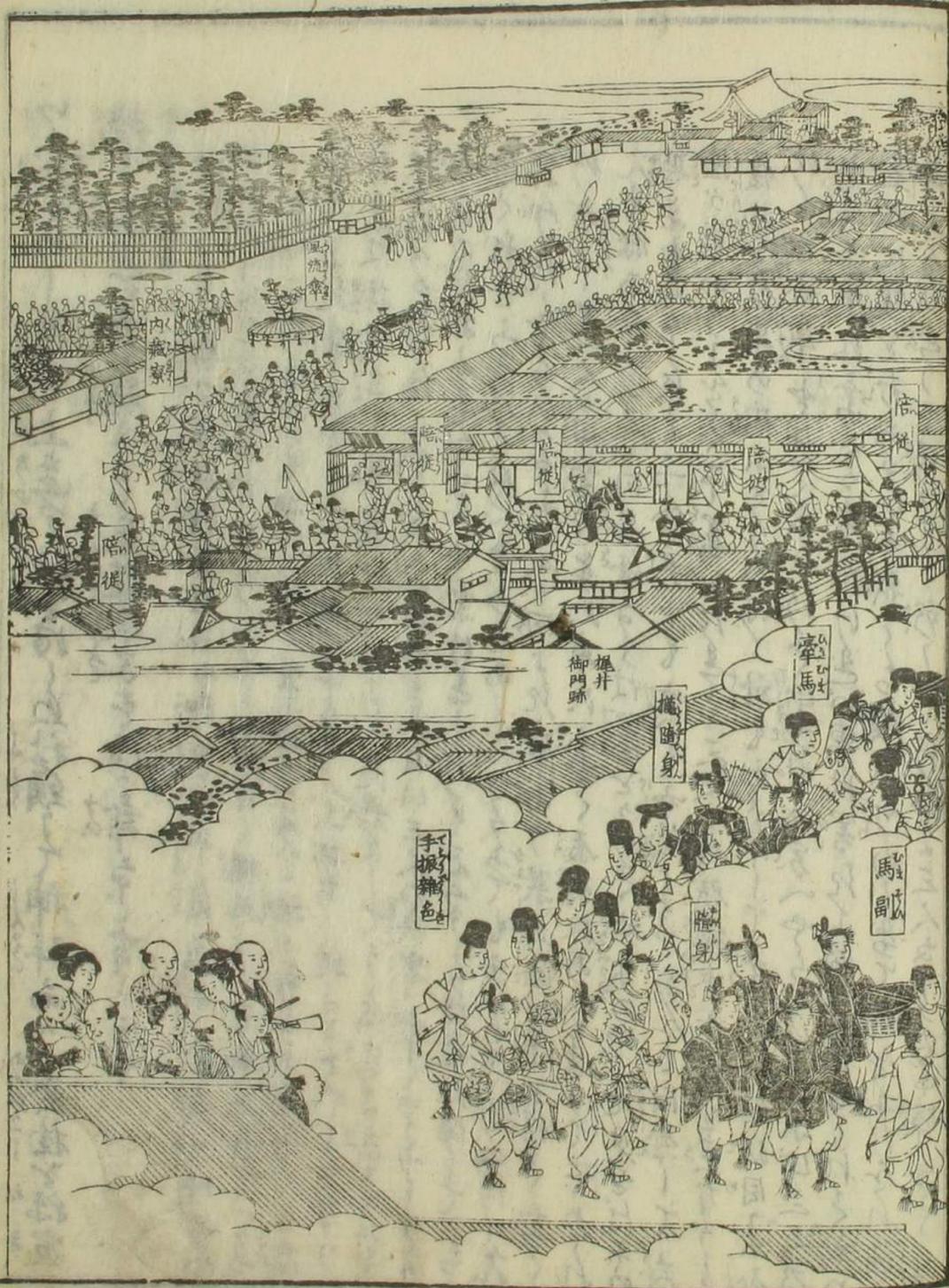
小車乃始之此

帰らるる後

かゝる子あり

所せり

持者



其三

六百五十名
がうれての

世のまじり

くさくさ

川あり

有奈相良



山手人おぼく

中支

ある御と云はし書と云く考内小云性貞
聖武の始よりは是徳の教来りてと云く

倭滅系

山城國葛野郡小あり愛宕持現の系絶りて

幸社を以て愛宕山上あり一鳥居を坂路六十町系神二座 倭特

冊尊 火産靈尊 神系圖傳云 軻遇突智者火神也故小は神一火

災を歩けり種を平安城の乾隅愛宕山にありて火災と降くせり

豊葦原卜定記云 戊亥 仁當 王都守護神明座 即天神第七

陰神也 火災 永退 爲也 止天 若宮 火産靈 於置玉 奈利 偏 仁帝

都諍謚 基也 云々

尚社姓古ハ鷹峯の東にあり天應元年釋慶儀今此靈地小樹ト將軍地也

神樂二基あり一基ハ野宮の神樂より聖文を倭滅小あり系神神明

以前昔倭勢の存内親王清崇帝の倭勢小近引の系倭倭小引あり

其式神樂二基と倭滅小の内小あり愛宕の神樂小冠を金鳳ハ愛宕

山より韓檀に納先山とトアヤ神樂小付不清深寺内小ト云云

あつて神樂の神樂と云く神樂小付不清深寺内小ト云云

して藤村氏司が今日其家より衣冠系絶を云々

朝日

更衣

先代旧車記云四月一日天皇羅綾鳳紋の単衣母衣

直装張袴と衣袴法王云九卿皆羅紋衣の單服を志其直装白

重なり天氣の正節小順て正道正装と爲と云々

云夏根源云云小衣長ぐんれ中衣此四布と云く揮袖素あり

清殿の御帳れと云くおきてと云く相替せ結成りて發代と云く

形と云くおきてと云く清殿と云く此線乃序印と云く

をうぬ内花系と云く此女房の衣ありきぬと云く夜ぐの御衣

或死云四季に造と云く夜と更る夏あり卯月朔より給成用衣をけ

下少袖を志は是と白きと云五月よりと云帷子と用白涼き付

四日

○水屋能 今日より南都水屋社の事紀あり社を春日の社
水屋川の南ふあり事神三座素盞烏尊稻田姫南海神女傳云
伏見院の清宇夜病流り病癒くは乃之古く神樂あり今地人
申樂に表はけしむ是と水屋の能と云

○廣瀬竜田祭 大和國廣瀬郡ふあり廣瀬社事神和智宇加
乃賣神 竜田社事神級長津亮命 級長戸也命

○云夏招源云是西社の大和國ふあり宗の日の慶勢也年に二夜乃之
大忌風神乃系しつふ是也風水の社とのなりて年數の多なる事
と祈中さうにやと云

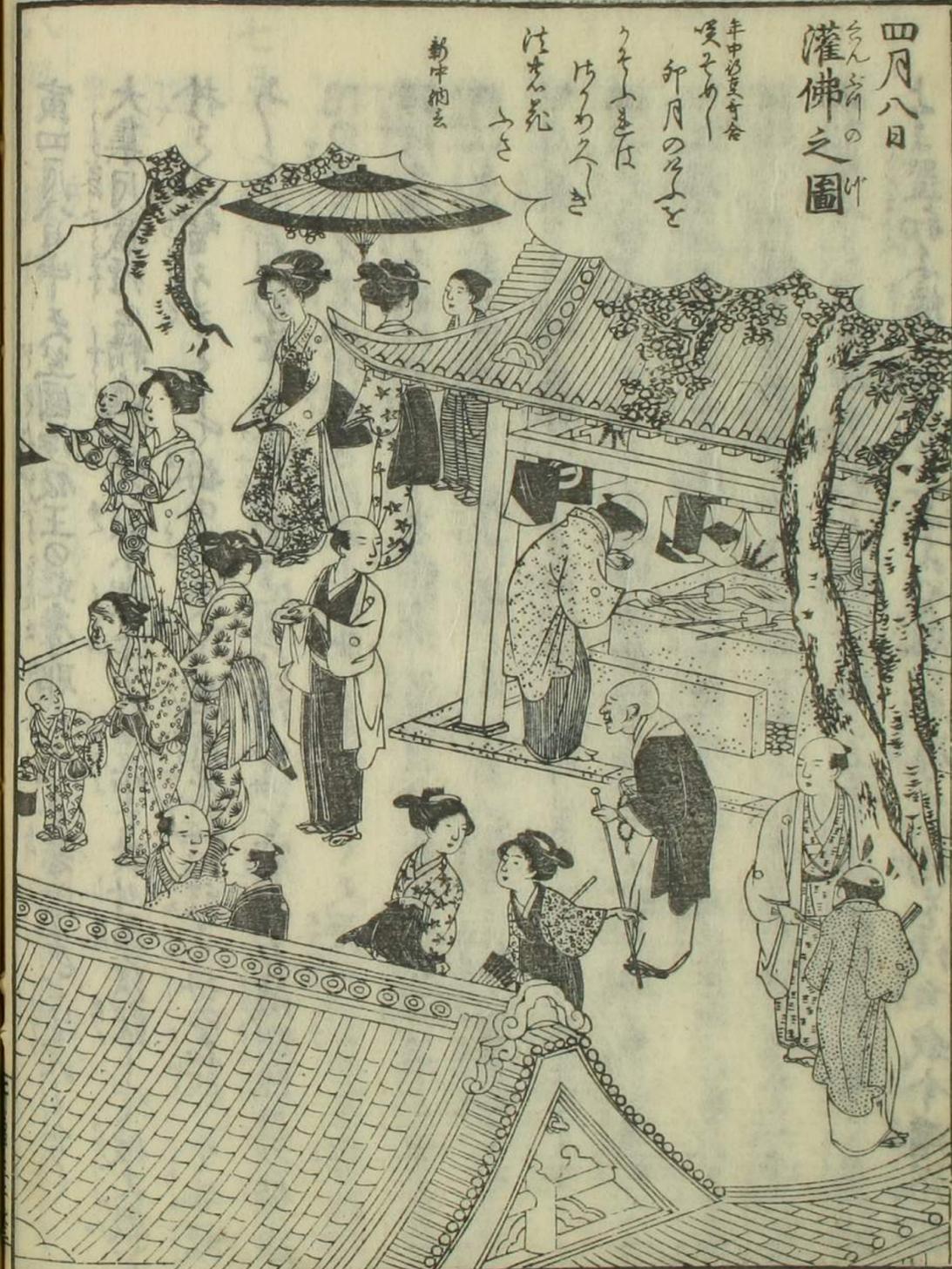
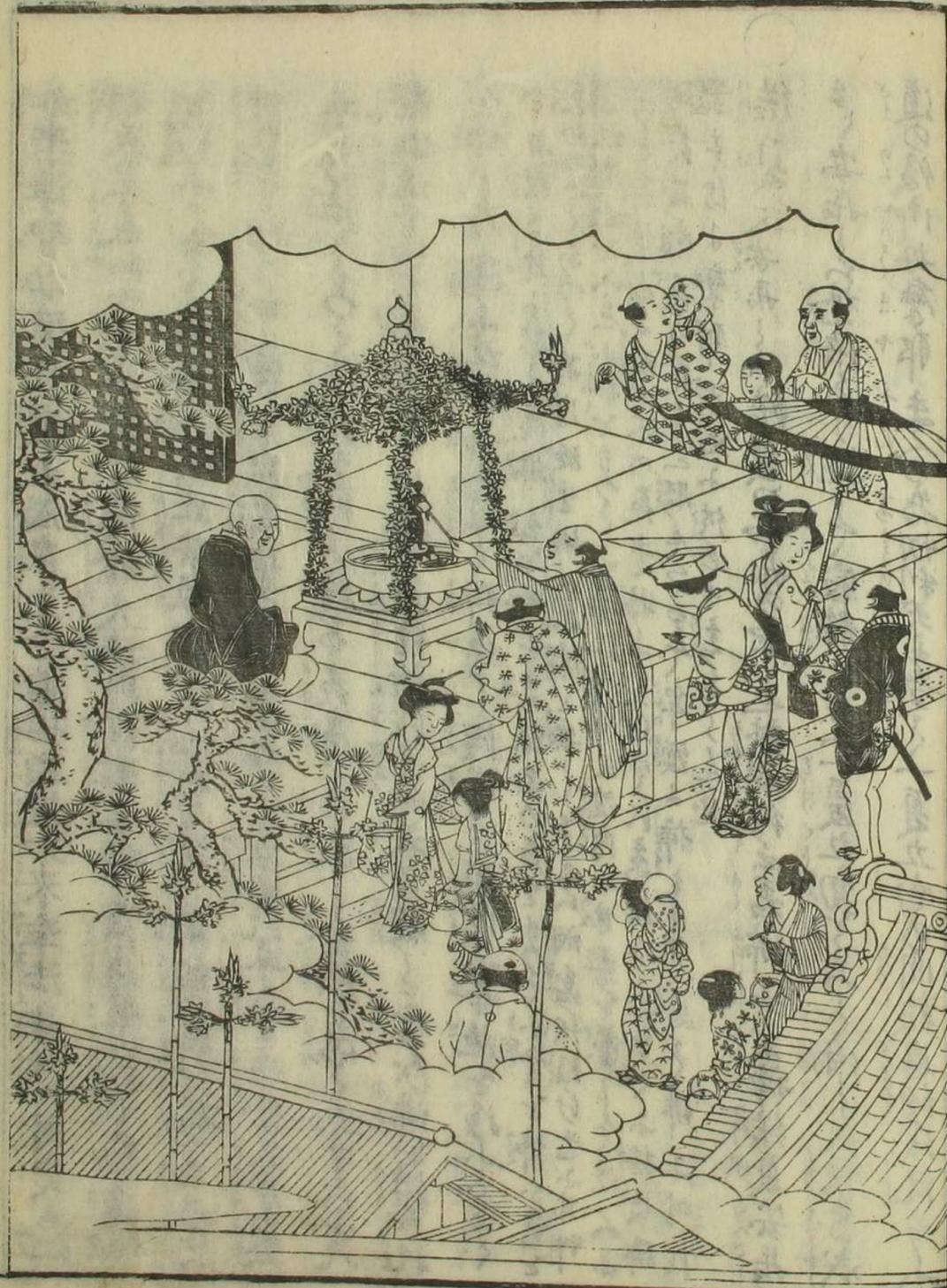
七日

○擬階奏 今あり云夏招源云は二月の列見のし成送經冊と二
省よりりて中なるは太皇の奏せむる儀ありと云

八月

○灌佛 釋尊誕生の日也佛祖統記云周昭王二十四年甲
寅四月八日中天竺國淨飯王之妃摩耶氏太子悉達多を生んと云

大集月藏經云精進と以の故小兜率天も居を其時前成記して彼天殿と
於て正智ろくく母の胎入り藍毘尼林に於て母の胎入り安穩
りて少り事七歩已小大地及び法山海と震動と彼維陀及び婆羅
陀の就王兒并水沫淋を洗浴する事と受と云又釋氏要覽云摩訶利
頭經云佛大衆に告むく十方は諸佛皆四月八日夜半子時を用く生と云
所以何事夏の淨く映罪悉く早て善持普く生毒事乃れを
かへ熱くは時氣和道と云也今是佛生日人民佛の功徳を念
佛の形像と活きせやく又浴佛功徳經云佛言く我今汝等小浴佛の法
と説諸の供養の中寂殊勝く人衆香湯を浴く淨慧の中に垂れん香
花作く妙林座を敷き上りて柱く佛と云法華湯と云く此身小浴之香
水を用早く後復淨水と以く其像以淋と云云淨洗像水と取く自の頭
上り置初小像よ於く上りよと淋の相應小は偈を誦云我今灌浴諸



四月八日
灌佛之圖

年中の夏寺會
受子あり

卯月のそと

うすしき

はくあふき

ふと

新中納言

愛方と深淵を是と其毎と云は付山伏寛く遊び人々と嘆けり云々
又中野の西へ深淵の向うて地
の附を望むる病つらう形と云

○法同嶽散談集 信濃國枕之郡あり 嶺南の嶽中なるあり

今日法同嶽へ登りて登山を各竹の筒水と稱し華鞋を履して大
寺と隣り候へり今日一日火事温く也嶽頂より大なる穴あり此日
多く年中中野へ入る散談と云れ其元寺に火事致さず中野嶽人
積と候はけり候へり其元寺に火事致さず中野嶽人
積と候はけり候へり其元寺に火事致さず中野嶽人

京師

九日 ○地主祭 洛東清水寺にあり 神社考云祭神大己貴也

幸比文殊菩薩と云寺記云坂上岡村舊靈と云
今神樂を舞書堂の南は洛東清水神樂あり又神子頭と稱す
竹野の雍列府志云地主祭古の緒所白山を五采の巾今石地蔵を
所是と云

諸國

十四日 ○當麻遼供養 大和國葛下郡あり 禪林寺と号す

尚寺は用明天皇社皇子麻呂古の創り内處初光万法飛院と號し
河内州山田郡あり白鳳二年尚麻呂移はけ地を彼小南の家地後
中將雅も此寺に候と遷住書乃起は承和年中惠心僧都敷ふれあり

未達引接の法會と云其後寛弘元年信長寛印供奉せ候と尚古本
其作當麻の概と云一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本
一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本

十三日 十日日也云々
其作當麻の概と云一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本
一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本

尚寺に連綿の蔓陀羅あり 借云僕射模佩の女中將雅也
其作當麻の概と云一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本
一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本

五形の色と川流又一女考ふ其殊成保殿の西水の隅あり幅一丈
其作當麻の概と云一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本
一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本

益修して遊はぬと云云
其作當麻の概と云一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本
一甲考ふ所り也信長寛印供奉せ候と尚古本

○神衣祭 旧事記云四月十四日天皇神服部小命して三河赤

延宝年中古曼陀羅の畫被を補ふて空座に懸先今用らるる曼陀羅之
して後徳保二年画工良安源景の寫に變たり

引神洞系と云く神衣と織又麻績連小命して去年作の神麻を
その敷絶美衣と織る神宮小奉侍也云々

延喜式云和妙廿四匹 八匹の度サ一尺五寸八匹の度サ一尺二寸 髻絲頸玉手玉

足玉の緒 袋襪の緒絲各十六丈 縫絲六十四條 長刀子一枚

後刀子 縫針 洋袴各十枚 著絲 玉串二枚 韓櫃一合 一合の衣と盛

宮一合 衣並雜 荒妙衣八十匹 二十匹の度サ一尺六寸 刀子針各廿枚

韓櫃一合 衣並雜 荒妙衣八十匹 二十匹の度サ一尺六寸 刀子針各廿枚

其儀式は神宮司祢宜内人等服部織女八人と辛心明衣と云け各
玉串と靴と巾衣の袋小陣列を祢宜に入て後向と宮内侍等
再着兩股短て手と拍更衣履脱退の再拍更短て退く荒妙衣是小
頭玉の玉と統と頸小くけ襟と袖と袖と子の飾り玉と玉と玉
又衣の裾と付るものよりてを在せ人の装束なり和妙の緒荒妙
衣と布

土塔會 攝津國東成郡天王寺南大門の下土塔塚の所小あり

祭神 牛頭天王

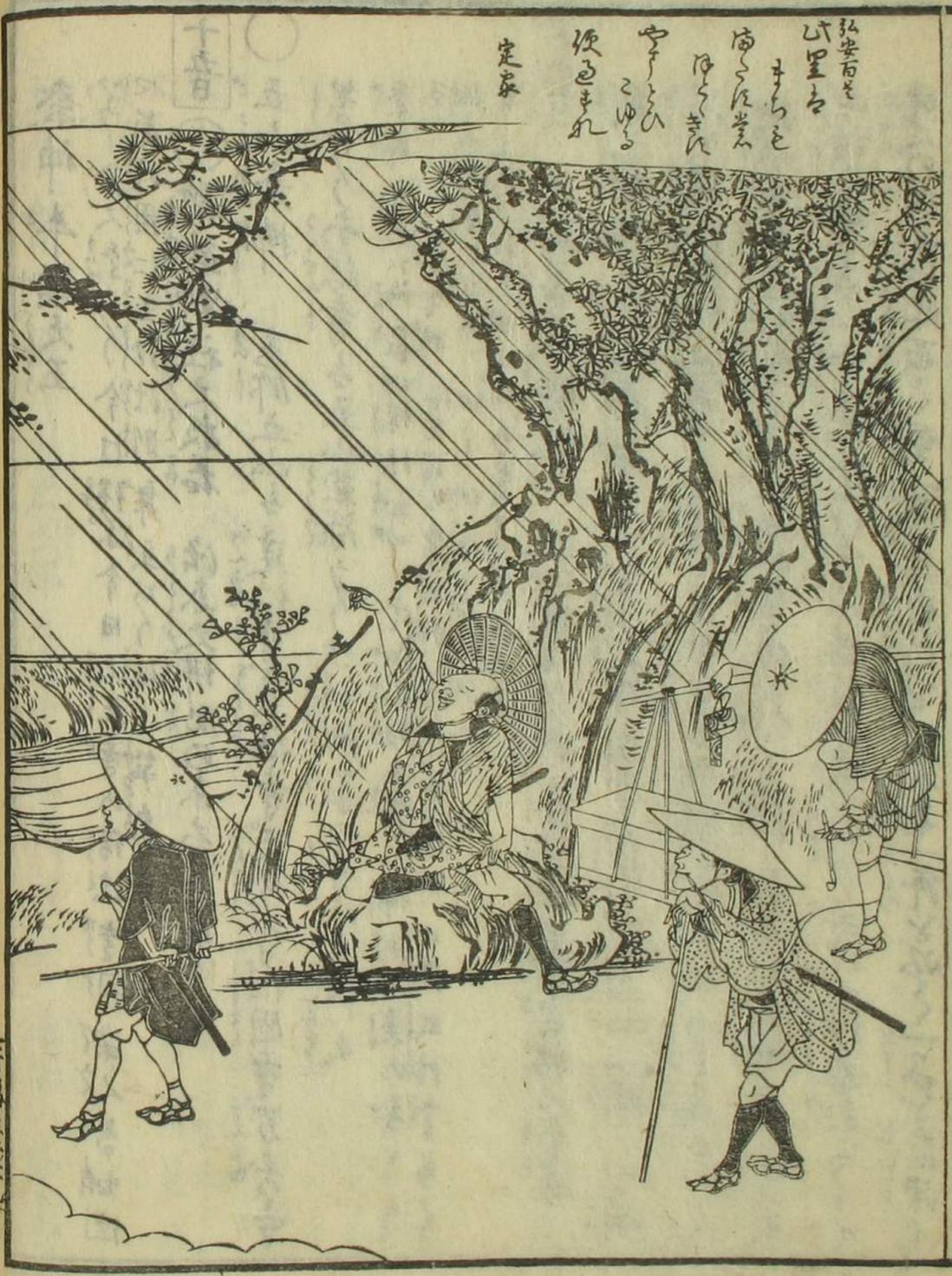
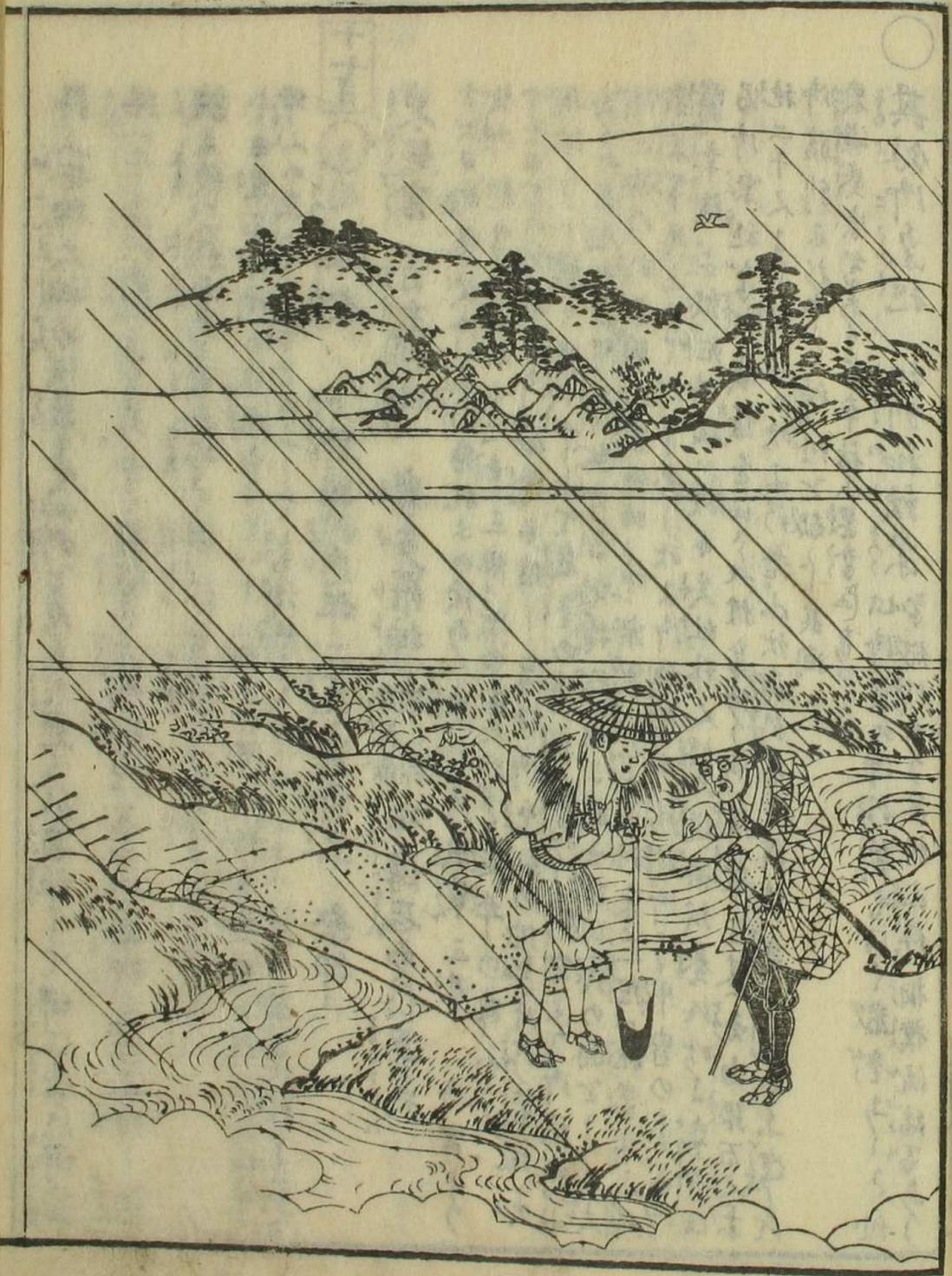
牛頭天王は天竺の神なり今日天王寺の傍に司祭人等出仕
に當りて用仁王經は別拜奉りて修業轉々云々

十五日 新熊野社之祝若 法東大佛殿の東南あり

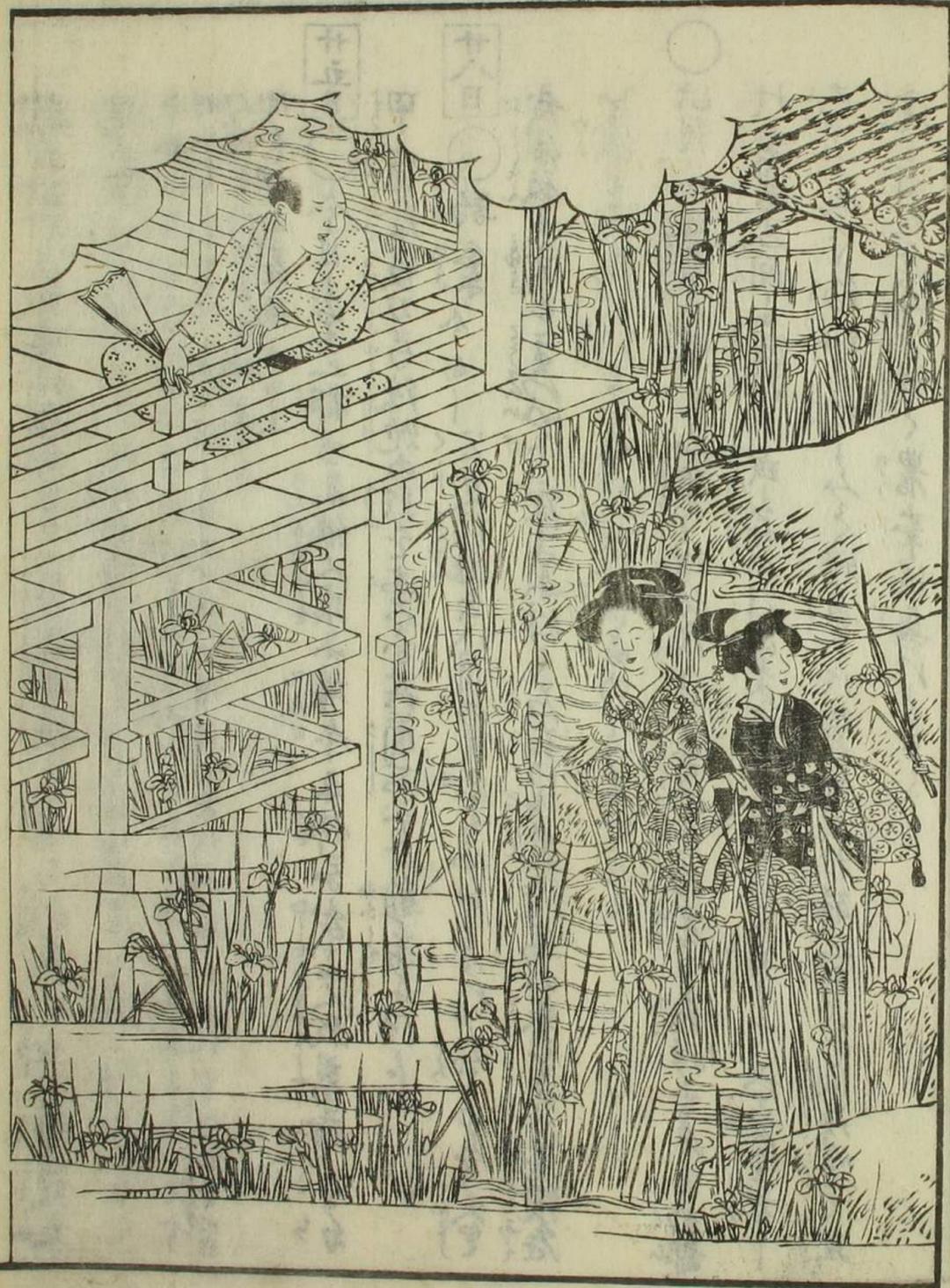
五山素拂 五山素拂寺と五山素拂寺ありは修海家の寺院也云々

駕打り南縁寺と五山素拂寺ありは修海家の寺院也云々

兼拂と云い海家の傍に出世して和者位小幡と拂子と兼の儀なり



私安而也
し里古
すら毛
備くは業
何くきん
やういひ
こゆ
便色ま丸
定家



賞羹子花園

池水くむく死
あけふかあそび
もたすくはさ
色に出はさ

小色殿章



漸く見取質頂礼瞻仰せらる小幡髪甚長一便ら利為く夜と換り流航
見る事能はしき一後世最侍と致さんとて石炭を以て固く封じとせし
今世山宝龜院代々此幸ふ所は桂皮色の清夜と今日麻糸よある又今
此の金堂聖業神額を以てむ聖業の傍侶を是の儀に以てはと作を運玉と心の
人殿も時の花と持おく
併に故小幡供とあり

廿五日 ○今日より三都の本偶人店小端午小飾り武吉人於萬藤を力
甲冑陰長刀弓法炮の技を臺ふ其箇亦一月離る小月ト

廿八日 ○駒乗 今や一公更相原云八月の名を母ありと何と公より天宮
武徳殿小幸とまのつ下座子小はく左右の傍監清馬の奏とる馬頭を
と後王清馬と引くは白く此は名まのてりやと云

○け月子親盛小啼く心まう樹林茂りて書海に苦甚る地結小まう一初
此臺客山間小漫花一或る林原の村里中一の職う病小又宿して甚受を貴一
已がさあぐの作し終りまう特具とん格物論云社結二四月の間疾傳て且
達る困る甚る候と候く農事法無にと云

○け月重代製とる家乗の老女と掃は是と重掃とる婦人販とる奇奇
唱ひとる掃とる是と重掃奇とるまうて其業を重く後冷しやよく
掃ひ陰平に七掃之其法文火のうし原と重ひ紙を掃く掃て後甚ふ
とまうと重小絶て重之の重まわら其重を山火清冷の夜小寄ふ是盛
一名の暑温と海人あまう一山火清冷の夜は其樂を多く至て上ふ也

○け月より山海静なり故小南都津煙の名人櫃表松前又後川と交易
一九月を賑く海國と是と松前渡とる

○け月より八月より一務遺ひ務成川に教りて船を捕しむ流河渡舟の
近は長良の務廻り小名を

○其仲屋敷中取と出り一船は務十二羽務はる一人取一人うりは船先
小は流網の中に海火成焼く務の頭一人者一文或人の網と付く務をひらきと
左のふふおち十三の務と川中に流り小務急と運りては其流りりて
合らうとたをむとせとるむ其同さうとていげうりやうとてさうと
靜小見白船を十たに寄る務とあつてあつてあつてあつてあつてあつて
と出り又水中に流りてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

○け月農民麦と刈りて秋は秋とる

○

○

○

○

○ け月けづき争あそび多く出いふ三さん宝ほう虎このつつまま少すく壯さう遊ゆうを院いんのままりり争あそび成なり 禁いん裏り
院いん中ちゆう再さい訪ぼうの

○ け月けづき牡丹ぼたん芍しやく薬やく蕪う子し花かの盛さかんんるる
牡丹ぼたんをを別べつ天てん花か川かわの何なん止し母ぼ大だい本ほんの牡丹ぼたんありあり上うへ探たん別べつ布ふ引ひのの色いろのの意い無む内ない
ふと又また大だい本ほんの牡丹ぼたんありあり上うへ探たん別べつ布ふ引ひのの色いろのの意い無む内ない
系けい脚けつ三さん十じゅう三さん回かいをを院いん地ち母ぼのの意い無む内ない
盛さかんんのの比ひ於お下した松しょう人にんままくくここ小こ法ぽうひひてて考かうええ

諸國中行事大成卷之三上終

諸國中行事大成卷之三上終

